

# リギ<sup>ッ</sup>山上の一夜

斎藤茂吉

青空文庫



スイスの首都 [Zurich] 《チュリヒ》をば午後二時十分発の急行列車で立った。そして、方嚮ほうこうを東南に取り、いわば四方から湖に囲まれたという姿の、Rigi 《リギ》の山上に一夜泊ろうとしたのであった。

汽車の立つ時、窓から首を出して見ていると、向うの丘陵に家のたて込んでいる工合は丁度長崎を思わせるようなところがあつた。汽車は急いで走つた。だんだん山地になり、その起伏の工合が如何いかにも鮮媚せんびであるのが通常ではない。遥かの谷間から出て来

る川の水は濁って勢づいて流れていた。

それから汽車は Zuger 《ツウゲル》 See 《ゼエ》 の湖に沿って

南下した。その湖畔には綺麗で小さっぱりとした村落などが見え

る。長い短いトンネル隧道を幾つかくぐり、隧道を出ると電気工場など

があつた。すでに峻しゅんぽう峰が見え出して来て、その裾に雲がかた

まり薄く藍の色に見えている。午後三時頃 Zug 《ツウグ》とい

う駅に著いた。ここは前面には湖を眺め、うしろに山を負うた村

であつた。そこらを通るとき、どうも瑞西の住民は独唄人などと

は人種の違ふところがある。猶太人ユダヤなどと共通の顔貌をした者が

幾らもいるなどと思つたのであつた。ただ鼻が大きく眉の濃い者

がいて、それが山人さびた重厚の感じを与えた。

Arth 《アルト》 -Goldau ゴルダウ ところからいよいよ登山車に乗

り換えた。山に登るに従つて眼界がひろくなり、西北の方にも、東南の方にも湖が見える。そうして、湖の水の光つているところ、影になつて紺青に黝くろずんでいるところ、そういう趣が段々と變つて行つた。紅葉した木々もそろそろ見えるようになった。高い峰の方から流れて来る水が滝となつて懸かっているところもある。頸くびに鈴をつけた牛が直ぐ近くにいて、耳を動かしてこちらを見ていたり、幾つかの鈴の音が下の谿たにの方で鳴るのが聞こえたりした。そういう牧牛がこの山に五千からいるそうであつた。實用向の鈴が、遍歴する旅人の耳には實用向でなくきこえる。一体、「仮感」とか「仮象」とかいう審美論者の説にも、やはり根ざすところが

あるのである。

紅い木の実が固まって見えていた。東洋の山水画家が人頭よりも大きい紅い丸を幾つも木の枝に画いているのにも、自然写生に根ざすところがあつた。或る時は、綿のような雲の上に夕陽を受けた雪山が見えたり、光を受けぬものは鋭く黒く見えたりした。

頂上までには幾つかの停車場があつた。頂上に行くまでの山水が既によかつた。Rigi 《リギ》 - Stafel, シュタツフェル [Rigi 《リギ》 - Klo:s クルス テルリ] などいろいろを通して、Rigi 《リギ》 - Kulm クルム に著いたの

は、太陽の傾きかけた頃であつた。その旅舎ホテルは立派で大きかつた。旅舎に著いて洋傘のないのに気付き慌あわてしていると、同車して来た外国の旅人が洋傘を持って来てくれた。旅人はやや老いた夫

婦でルマニアあたりの者であった。旅舎の部屋は立派なのは幾つもあるが、幾つか見て廻つて十八フランケンのに極めた。当時の相場で邦貨九円余に當つていた。

それから旅舎を出て、後ろの方にある丘にのぼつて行つた。この丘は展望が好く利くので、アルプス山系のうねりを観ることが出来る。山系のうねりというのも、高く鋭いには白雪が降り、いまだ雪の降らないのもあり、相交錯したうねりであつて、いわば生きていゝようなものである。

湖の大小がその間に湛えている。直ぐ目の下には Zuger 《ツウゲル》 See 《ゼエ》 が、間にやや狭い縊くびれを持つて北方に見えなくなつてゐる。太陽は傾きかけて、湖水の面は、遙か向うは水銀の

色に光り、近きあたりは黝ずんだ紺に見えている。北の方に湖の尽きているその彼方かなたは瑞西の首都 [Zurich] 《チュリヒ》であつて、ゆうべまでその旅舎とまに宿つていたのであつた。そのあたりから山脈がやや低くなつて、独逸の国境を越え、遙か彼方に見えずなつている。ここからやや左手は黒林シュワルツフルド地方である。それから右手に行くと、Baden 《バアデン》地方になり、もつと右手は Bayern 《バイエルン》地方になるのであるが、その Bayern の首府の民ミューンヘン 頭ヘン にあつて僕は丸一年余り勉強をして、つい二ヶ月前までは其処そこにいたことなどを思うと、静かな寂しい気持にもなるのである。重りかさな畳まる山嶽と遙か彼方に展開する国土と清く澄んでいゝ空気と、そういう空間的關係が如是によぜの感情を起させる、



その一種のあやしきこそ東洋山水画の動因ともなっているのであらうか。

僕の今立っているところを旅舎の者どもは「頂上」といつている。そこを少しく降りて左手に来ると直ぐ眼前に高山が重畳して、僕なんかを圧するという気持である。その下に [Viervaldsta:ter

《ヴィルワルトシュテツテル》 See 《ゼー》」の一部が見える。

この湖は此処ここから西南の方に章魚たこの如くにひろがっている大湖で、それに灑ぐそそ川などが糸のように細くなつて見えている。 嶽たけがらす 鴉からす

のような黒い鳥が一羽湖の方へ飛んで行つた。明朝はこの山上を下りて、それから汽船でこの大湖を渡り Luzern 《ルツェルン》の方に行くつもりである。

この「頂上」は、風が強く、未だ九月下旬というに僕は冬の外套きを着ていた。その丘に三、四人の女が物を売っていた。多くはおうな媼なで渋い模様のある布をかぶっている。若い娘が一、二いて紅い豆しぼりのような模様の布をかぶっているが、頬が赤く、この高山の空気に生育した面持であった。これらの女どもは絵葉書だの、木細工の牛だの、笛だの、牛の頸につけている鈴の小さいのだの、駄菓子のようなものだの、そんなものを売っていた。僕はそのそばに行つて、いろいろいじつて見たが、余り元始的で、故郷の土産にするようなものは極めてすく尠すくなかつた。小さい木製の牛をいじつてみると、耳が突然除とれたりした。これは膠にかわが丈夫でないので除れたのであつたが、僕は知らん振ぶりして多くの木製の牛の中にそ

れを交ぜてしまった。

太陽は黄色になつて山嶽に近づくので、女どもはそろそろ帰り

支度にかかった。女どもは僕らの旅舎ホテルの建っている、Rigi 《リギ》

クルムに住んでいるのではなく、もつと山腹の方に住んでいる。

女らの露店には鈴をつけた山羊やぎも時々寄つて来、白い牛、斑まだらう

牛し、黒牛なども寄つて来るが、女らはそういう獣にはかまわず

に、店を片付けて帰るのであった。こここの旅舎の者を除いてそう

いう住民のいるところには小さい加特力カトリックの寺もある。これは或

る信心ぶかい二人の女人によつて建てられたのだというものもあ

つたし、それゆえその近くの巖間いわまから清冽な水の湧出わきるのを「尼

の泉」と唱えるなどともいった。また或処の小さい寺には、「雪

の馬利亞マリア」という名なども附いていた。

アルプス山系の一小部分ともいっていい、この Rigi も十八世紀の中葉頃から、ぽつりぽつりと登山者の注目を牽ひき、十九世紀の初葉にはこの頂上まで登って展望を楽んだ者はよほど増したということである。西暦一八一六年には此処に一つの旅舎ホテルが建てられたのだそうである。しかし何といってもアルプス山系のうちの一つの山の頂である。ここに登るものも、年経てこの山腹あたりに住んだ者も皆信心ぶかいものであったに相違ない。僕は暫しばらく下界に住んで来て、さてこの山嶽をば通りしなに既にセガンチニの画境の種々相を感得することが出来た。

セガンチニもいろいろなものを画いた。けれども、その一つの

傾向として、あけぼの「曙」（あるいは「黄昏」）と題した油絵を取つて来てもいい。この絵を僕は或時は独逸で看み、また数日前に瑞西で見たのであつた。「Dämmerstunde」となつていた時もあり、「*trübe Stunde*」となつていた時もある。日出前の高原を場面として、（あるいは「黄昏」であつて、日没後の余光ともおもう）左手に一人の女が石に腰を掛け、膝の上に両手を組んでまなこつぶ眼を瞑っている。厚ぼたい衣を着て、頭には水色きれの中をかぶっている。その女の前には鍋に何か煮てあり、それから白い蒸気いきが立ち、鍋の下に赤い火の燃えているところが画いてある。そのあたり一面は小石原で、石と石との間には草が生えている。セガンチニは、すべてそういうものをば種々の原色の顔料で、一筆一筆に

盛りあげている。その丹念に<sup>よ</sup>扱って、絵に静さと厚みとが出来て来て、甘い感傷性と或る調和を保っていたのであった。女の右手には一匹の大きい斑牛がいて頸に鈴が附いている。あたかもいま吠えているところで、頸を延べ口をあいたままを画いてある。その牛の彼<sup>かなた</sup>方向うには柵と牧場とがあつて、一人の男が多く牛羊を連出すところを段々と遠くに画いてある。その向うには既に峻峰が迫っており、左手には寂しい人家を画いている。女の膝のところには焚火の火明りがうつっているから、暁が未だほの暗いのであるが、太陽が暫くするとのぼる気配を示して、黄色の光の放射しかけているように画いている。その他の空の部分は黄・赤・紫・青など細かい顔料で埋めてある。

丹念で静かなこの絵は、アルプス高山国の農民を題材として、  
疲れた旅人の僕の心を慰めてくれたのであつたが、今も僕は Rigi  
山上にあつてそれらの絵を思いおこし、その写象は一種の現実  
性を帯びて僕の眉間にあらわれるのであつた。けれども僕はそう  
いう静かな愛と神秘から、ハウプトマン劇にあるようなもつと熱  
したものにも聯想が移つたが、若い僧が山上にのぼつて行くと、  
山羊の牝が寄つて来て、僧の持つてゐる聖典を食べてしまふあた  
り、豊かな娘のその紅い唇くちびると心臓の鼓動と、そういうものにも移  
つて行つたが、それは長続せずに消えた。物売の女らの帰りかけ  
たこの丘は、恣ほしままに寒風が通り、湖水の光もそれを甲よろう山嶽も、そ  
の山嶽の上に無限に畳まつて見える山嶽の雪も、ついに僕をして

大戦後に起つた熱烈難渋な芸術には親したしましめなかつた。

「だいぶ日が短かくなつたようだな。やつぱりあの湖水の方が南らしいね」「そうね。巴里パリを立つてから、もう幾いくんち日か知ら」

「もうそろそろふたつき二月だね。海峡でお前反吐へどついたでないか。西洋人の尼の奴もお前の側で反吐へどついていたつたね」「あたし、もうホテルへ帰るわ。此処のところはだいぶ寒い」。

妻と二人は「頂上」の丘を下りて旅舎ホテルに帰つて来た。玄関で絵葉書などを買って、そこの貼紙を見ると、「御客様方は、日の出三十分前に、アルプス山の角笛を以てお起こし申上げます」

St. vor Sonnenaufgang werden die Gaeste durch Alphornblasen geweck

と書いてあつた。



帰って来て見ると、部屋は正方形ではなく角のところが少しく欠けている。その部屋に小さい寢床が二つ並んでおり、円い卓が一つと、椅子が三つばかりある。

僕は外套を著、頸に襟巻を巻いて、窓の玻璃はりに顔をおしつけるようにして山を見ていた。山は旅舎ホテルから南方にたたなわるもので、近いところから段々奥の方の山になると既に白い雪が降って水晶の結晶群を見るようである。窓の玻璃が僕のつく息で曇るのを、僕は手の掌ひらで拭いた。

太陽は右手の山の向うに没したらしく、山の色が刻々に変つて行つた。それから下の方にある湖水の一部分が鉛のように見えたり、深い蒼色に見えたりしているうちに、雲が幾通りにも湧いて来て湖の方へ沈んで行つた。暮色のおのずから到つたころ、窓の下を太いズボンを穿いたひとりの若者が煙管きせるをくわえながら通るのが見えた。

そうして僕は沈黙して小一時間も山嶽を見ていただろう。妻は妻で、山嶽などは見なかつた。外套を著たまま妻は両手を円卓に突いて顚顚こめかみのところをおさえているうちに自然と両眼を瞑つただろう。山上のこの部屋の小一時間は、二人に調和があるようでもあり、ないようでもあつた。

そのうちに電気燈がともった。二人は思出したように相顧みて外套をぬぎ、幾らか儀容をただして食堂に下りて行つた。食堂は大広間で立派であつた。真夏の頃はこの食堂に客が一杯になるらしいが、きようはせいぜい三組か五組しかいない。僕らは窓際の食卓に就くと、給仕は其処に電気暖炉を持って来てくれたりした。

料理は凝つた旨いもの<sup>うま</sup>を食べさせた。二人は、白葡萄酒などを飲み、しばらくぶりで静かな夕<sup>ゆうさん</sup>餐をしたのであつた。それからサロンに行つて新聞などを見、きよう立つてこの山上にのぼつて来た道筋だの、明日立つてこの山をくだる旅程だのを話合つた。それから生れ故郷の誰彼に便りを書こうとしたが、ただ独逸にいる一人の友に絵ハガキ一枚書いたに過ぎなかつた。

差向き僕らは体の疲つかれを休めようと欲してサロンを辞した。そして廊下で一人の女中を通り過がったが、その女中は僕らに会釈をして通つて行つた。さらに部屋に歸つて見れば、「籠る感じ」である。邪魔するもののない気安さと落付があるに相違ないから、ふたりは突つっけん慥けんに相争うようなことはなかつた。けれども今此処を領している静寂はついに二人に情感の渦を起させることがない。ふたりは暫らく無言で部屋のなかにいたけれども、僕は今度は服を脱して床のなかにもぐり込んだ。

そうすると床のなかに湯ゆたんぼ婆ぼが入れてあつた。「おや湯婆が這入つているぜ。……やつぱり山やまんなか中なかは何か工合のいいところがあるな」そんなことを僕がいつて、足で触つてみると民ミン頭ヘンあ

たりの湯婆とは感じが違うから、引出すと徳利のような恰好をした湯婆であつた。

「あたしの方にも入れてあるかしら」

「あら、やっぱし入れてあるわ」

「これはまた妙ね。お酒か何かの入れもの入物じゃないの」

「そうだわ。此処に何かしるしがあるんじゃないの。これはまた妙ね」

僕の妻はそんなことをいいいい、徳利のような湯婆を元に戻して、それから何かしている様子であつたが、自分の床に這入つて行つた。僕は初めて維也納ウィーンで冬を越したとき、宿の婆さんに頼んでようやく四角なブルキ製の湯婆を見付けてもらったのであつたけれども、それではやはり駄目であつた。そこで僕は欧羅巴ヨーロッパの

人々は湯婆を余り用いぬものと観念して、冬の夜を宿に帰って寝るまでは大部分カフエで過ごすようにしたのであった。しかるに独逸の民頭に来てみると此処には完全な銅製のものからブルキ製のものまで湯婆が揃っており、また机に向つていて足を暖める電氣為掛じかけの装置も出来ていたので、僕は寒さの厳しい民頭の冬を凌ぐことが出来た。

電燈を消してから暫くになるが、妙に僕の目が冴えている。夜は静かで、沁み透るようである。虫の音なんかも聞こえず、雁がんのこえなんかもしない。妻はいつの間にか幽かな息をしながら寝入つたらしい。

湯婆に触つて見ると未だ冷めずにいる。観念のつながりは、所し

詮よせん僕の妻は、天竺てんじくのむかし難陀なんだの妻孫陀利すんたりのようには行かぬ  
 ということに落ちて行つた。しかし大迦葉だいかしようは、清浄な顔をして  
 いた妻の妙賢女みょうけんによと合会ごうえすることなしに十二年を経たとも聞い  
 ている。僕の観念のつながりはそういうところにも落ちて行つた。  
 さて僕はやや諸国を遍歴して今アルプス山脈の中にいるのである  
 が、日本の国土にいるような気もしている。その差別は今の瞬間  
 にはない。

僕は一ねむり二ねむりもしたと思うけれども未だ眠から醒めて  
 いない。その時に既に角笛は鳴りはじめていた。はじめのうちは  
 半ば夢のような状態で、間の延びた物ものあわれ哀あわれな角笛の音律を聞く  
 ともなく聞いていたのであつたが、意識がようやく醒めて来るに

従つて、節まわしが少し巧者過ぎるから喇叭ラッパではないか知らんなどとも疑つたりした。

けれどもそれは普通の喇叭などでなかつたから、目ざめて見れば二たび僕らをばアルプス山上の氣持に引戻すのであつた。程ほどへ経て僕らは起きた。それからなるべく寒くないように著込んで階段をのぼつて行き、東方にむかう窓のところに佇ちよりつ立して、いまだ黒く明け切らない、山脈の上の空がほんのりと黄色いを見ているた。

変に凝こもつた雲のかたまりが少しずつつ動いているらしく、その上方の鋭い山脈の色合が黒から藍と變つて来ても、西洋人どもは誰ひとり見に来なかつた。そこで僕は部屋に行つて毛布を持って来、



二人はそれで寒さを防ぎながら随分辛抱づよく其処に立っていた。そこで、つまり僕たちふたりは障しょうが礙がいを微塵も受けずにアルプス山上の美しい日の出を見たのであつた。僕は独逸文学のことは好く知らずにしまうが、その中には日出写生のいい文章は幾つかあるであろう。山上の美しい日の出は、いわば劫ごう初しよの気持であり、開運しるしの徴しるしでもある。それに較べると、現に連れ添うている、我執をもつ僕の妻なんかは、実に奇妙な者のような気がしたのであつた。



# 青空文庫情報

底本：「日本の名随筆」2 夜」作品社

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

1999（平成11）年4月30日第7刷発行

底本の親本：「斎藤茂吉随筆集」岩波書店

1986（昭和61）年10月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※底本では、「」の二点は右下に、「」の二点は左上に、置かれています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2010年5月30日作成

2011年4月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# リギ山上の一夜

斎藤茂吉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>